

発行日 2008年3月28日 編集 広報委員会

発行 日本パーソナリティ心理学会 (旧・日本性格心理学会)

事務局 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19 (株)国際文献印刷社内

電話 03-5389-6243 FAX 03-3368-2822 URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/jssp>

【巻頭言】

大会参加のパーソナリティ

川野健治(国立精神・神経センター精神保健研究所)

私は、今年、パーソナリティ心理学会第17回大会に参加するつもりです。あなたは、参加なさいますか。

学会設立時、私は院生会員でした。それどころか、学会の発起人の一人でもあります。なんだかすごいベテランのようですね。あるいはずっと熱心な会員だったような印象を持たれるかも知れません。しかし、正直なところ、大会参加は学会設立当時の数回と直近の4、5回だけで、その間は「中抜け」になっています。

私にとってパーソナリティ心理学会(当時、性格心理学会)は、少し重たい学会でした。教科書で名前だけ知っている偉い先生に夕食をご馳走になりながら、「あなたにとって心とはなにか」などと尋ねられ、冷や汗をかいたことなどを覚えています。その「ハローエフェクト」なのでしょう(笑)、学会の内容もなんだか堅苦しく感じていましたし、足も遠のいてしまったのかも知れません。

しかし最近、役目柄、学会に参加するようになりました。「面白くなってきたぞ」と感じてもあります。昨年度大会のシンポとワークショップのタイトルを並べてみましょう。「文脈に埋め込まれた時間と共にある経験を捉える枠組み」「パーソナリティ理解のためのダイナミカルアプローチ」「若き心理学者たちの模索」「PERSONALITY AS A CULTURAL CONSTRUCT」「心理尺度のつくり方」「盲導犬を科学する」・・・多様です。堅苦しいというよりは、自由さが伝わってきませんか。

そもそも、大会参加の魅力とは、どのようなものでしょう。昨年度、堀毛一也先生、鹿毛雅治先生、大

久保智生先生と大会活性化委員会で議論して、三つの意義を確認しました。一つ目は、祭り機能、集い・盛り上がり、お互いをエンパワーメントすること、二つ目は、出会い機能、学会でしか会えない人と知り合えること、三つ目は省察の機能、学会で知り・学んだことを通して研究テーマを深く考えるということです。昨年度の大会にもこれらをも高める知恵が詰まっています。例えば大会活性化委員会が関わったのは、プレセッションとしての若手研究者の集い(出会い機能)、大会発表賞(祭り機能)、ビールを飲みながら(笑)議論したアフターセッション(省察機能)の運営でした。

今年度も、大会発表賞があります。ポスター発表と口頭発表の両方に賞を設け、しかも抄録原稿段階から審査するなど、昨年度からの変更点もあるので、あらためてお伝えします。あなたの履歴書に「受賞歴」はありますか。

ところで昨年末、「演劇における how to 個性記述」という当学会の公開シンポジウムに出させていただき、演出家の宮沢章夫さんから面白い話を聞きました。「作者は神様ではないので、思い通りに役者が動くわけではない。脚本で個性を決めるのではない。動けるようには脚本を書く。文章を推敲するが、俳優との共同作業もまた推敲である。俳優の体を通したときに「違う」とわかることがある」。学会もまた、研究者の体を通してこそ、面白さが現れる。きっとそうです。

さて、あらためて。あなたは今年、参加なさいますか。

今回の「ミニ特集」は、異文化間心理学を研究されている鈴木一代先生、文化比較を研究されている毛新華先生、尺度の翻訳の経験があります山内貴史先生に「日本語とパーソナリティ」というテーマについて書いていただきました。

バイリンガリズム・バイカルチュラリズムとアイデンティティ

鈴木一代（埼玉学園大学人間学部）

私の専門は「異文化間心理学」です。「異文化間心理学」における典型的な研究は比較文化研究ですが、私の興味は、文化間移動や異文化接触によって生じる心理的現象や多文化環境で問題となる心理学的現象の解明です。そのなかでも、研究の中心は、多文化・多言語環境のなかで育つ子どもたちのパーソナリティ形成、特に、アイデンティティ形成や文化的アイデンティティ形成について明らかにすることです。

研究のフィールドは、インドネシアのバリ州（バリ島）です。バリ島は、国際的なリゾート地として有名ですが、マーガレット・ミード（Margaret Mead）やクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）というような文化人類学者がフィールドとしていたことでも知られています。たとえば、ミードは、グレゴリー・ベイトソン（Gregory Bateson）とともに、“Balinese Character: A Photographic Analysis”（1942）を著しています。

バリ島では、1980年代の終わりごろから、日本人観光客が増え続けています。日本人とインドネシア人の異文化接触の結果、日本人とインドネシア人の国際結婚が著しく増加し、同時に、これらの夫婦の間に生まれる子ども（日系国際児）も年々多くなっています。現在、バリ島に居住する日本人・日系人の数は、約4,000人、そのうちの半数程度は、国際結婚の日本人（元日本人）と日系国際児とも

言われています。もちろん、欧米諸国出身の人々とインドネシア人の間に生まれた子どもたちもたくさん住んでいます。バリ島は、急速な国際化のなかにありますが、他方、人々の生活に深く浸透しているバリ・ヒンドゥ（Bali, Hindu）と呼ばれる独自の宗教や伝統・文化を固持しようとしています。

そのような状況のなか、私は、1990年代初頭から、日本人の親とバリ（インドネシア）人の親をもった日系国際児の言語・文化習得や文化的アイデンティティ形成のプロセスとそれに影響を及ぼす要因を明らかにするために、継続的な調査を始め、現在も続けています。現地の文化・社会・歴史的な文脈を踏まえた上で、日系国際児たちを乳幼児から追跡してきましたが、そのうちの多くは青年期に達しています。また、この研究の一環として、文化間移動をした日本人（親）の文化適応やアイデンティティに焦点をあてた研究や、バリ人の心性や考え方を理解するための研究もおこなっています。

異文化間結婚や国際児の増加は今日の世界的な傾向です。日本でも、二つ以上の言語・文化環境のなかで育つ日系国際児が増えています（出生総数の2.1%、2006年）。日系国際児が二つの文化を統合し、アイデンティティや文化的アイデンティティを構築していく過程についての研究を通じて、アイデンティティや文化的アイデンティティへの理解を深めることができると考えています。

日本語の表現と「我」の強さ

毛 新華（大阪大学人間科学部）

「今朝、満員電車の中で足が踏まれ、やっと降りたら雨に降られ、そして大学に来て、レポートの不出来で先生に怒られて、・・・」と、11年前に日本に来たばかりの私は、日本人の友人から発する一連の受け身の表現にびっくりしました。別に私の母国語の中国語の中に受け身の表現がないわけではないのですが、日本人はこのような受け身的な表現を特に愛用していると実感しました。

これに対して、日本人は、嫌いという訳ではないようですが、あまり使わない言葉があります。それは「私」という言葉です。自己紹介を行う時に、この特徴が明らかです。中国語や英語などによる自己紹介では、必ずと言っていいほど、「私は・・・です。」という構文になりますが、「自己紹介」といいながら、日本人は「私」を使わず、「・・・です。」という構文になります。また、日常会話の中で、自分のことを話す際に、日本人が「私」を使わない構文が多いのに対して、中国語の表現では、「私」から始まる表現が多数です。

日本で勉学生活を送りながら、日本人との会話が増える中、次第に私もすっかりこのような「受け身」表現を愛用し、そして、「私」への敬遠の表現の仕方に馴染んでしまいました。と同時に、ふっと思うと、来日当初の自分と比べて、変わってしまった部分があるような気がします。とりわけ、ものごとに対する考え方では、「自分がこうこうだと思う」

から「人にどう思われるだろう」に変わり、集団の中でもともと強かった「我」がずいぶん弱くなりました。

このような自分自身の変化の由来は日本語の「我」の弱さからなのか、日本文化からなのかは特定できませんが、日本語が原因であることは否定できないのではないのでしょうか。

日本人のこの「我」の弱さは感覚的なことにとどまらず、研究データにも裏付けられています。私は日本にいる中国人留学生と中国人にいる日本人留学生を対象に、集団の中で人とのかつきあいにおいて、中国人と日本人のそれぞれの重要なポイントについて自由記述調査を行いました。その結果、日本人の最大の特徴として、「他者に対してむき出しの自己表現をしない」ことです。これに対して、中国人にとって人づきあいの拙さの特徴の一つとして、「自分のことを出さない」ということです。このように見ると、日本人が「我」を出さないことが重要で、中国人が「我」を出すことが大切ということです。中国人と日本人とでは、「我」への認識が正反対ということになります。

グローバル化の時代に、「我」の強さの異なる国々の人々が異文化コミュニケーションを行う際、このようなことを意識して付き合う必要があるのではないかと思います。

尺度翻訳の肝

山内貴史（東京大学大学院総合文化研究科）

今回、海外のパラノイア（paranoia、物事を自分に関連づけて被害的に捉える傾向）測定尺度の日本語版を作成したことがきっかけで、尺度の翻訳に関するテーマで筆を執らせて頂くことになった。

いきなりだが、そもそも、尺度を使うに当たり必ずしも海外のものを翻訳する必要はない。日本だけで使うことを前提とすれば、自分で最初から日本語で作成すればよい。しかし、世界的に使われている優れた尺度は概ね英語で作成され、それが各国語に翻訳されている。よって、日本で英語が公用語にでもならないかぎり、このような尺度を使うには日本語に翻訳して用いる他はない。また、優れた尺度の優れた翻訳版の作成はその意義も大きい。

当然ながら、尺度の翻訳では、原版と項目内容はもちろん、教示文も含め、忠実かつ正確な（不自然な直訳という意ではない）翻訳が求められる。原版作成者の意図を汲み取りながら、微妙なニュアンスも含め最適な訳語を対応させていくことになる。これは純粋に言語学的な困難を伴う。また、例えば、パラノイアに関して言うと、西欧文化圏では毒を盛られたり何らかの陰謀があるのではという内容の疑念が顕著にみられることが指摘されているが、わが国ではあまりみられないといった言語・文化間の背景事情の違いも翻訳を困難にする（また、文化差を考慮し、項目や記述を追加または除外したい場合もあるだろう）。

正確な翻訳を裏づける試みとして、バックトランスレーションがある。これは、原版の翻訳文をもとに再度英訳を行い、その訳文と原版とで内容やニュアンスに相違はないかを確認する手法である。正確に翻訳されていれば、それをもとに再度英訳した英文は原版と相違のないものとなるはずである。しかし、このバックトランスレーションは思いのほか難しい。難しいというのは、経験された方はお分かりかと思うが、バックトランスレーションされた文が原版と全く同じになるということはまずない（と思われる）。これは翻訳者の力量云々の問題とは事情を異にする。ある意味これは当然で、英文和訳の場合であっても、その日本語訳は程度の差はあれ人それぞれになるのと同じである。

とはいえ、尺度翻訳の肝はまさに正確な翻訳という点に尽きる。なぜなら、わざわざ翻訳する以上、原版と日本語版の尺度は完全に「同質」で同じものを測定している必要があるためである。厳密に言えば、1項目でも原版と明らかに意味の異なる項目が日本語版に含まれた時点でもはやそれらは異質であり、厳密な比較には耐えられないということになるであろう。つまり、使用言語が英語から日本語に変わるだけで、それ以外の中身に何も変わるものがないというのが本来は理想的な尺度翻訳であると私は考えている。いつの日か日本で英語が完全に公用語になり、最初から英語で尺度を作成するような時代が来ないかぎり、正確な尺度翻訳を目指した戦いは続くのである。

日本パーソナリティ心理学会第16回大会「優秀大会発表賞」

前回に続きまして、日本パーソナリティ心理学会第16回大会にて「優秀大会発表賞」を設けました。今回は、6名を上限にして選考しました（受賞対象は筆頭発表者のみとなります）。選考委員による投票を集計し、常任理事会にて審議した結果、尾見康博氏、井上美沙氏、外山美樹氏、田中麻未氏、本田周二氏、新田静枝氏、の計6名（以上、発表番号順）の方に、優秀大会発表賞をお贈りすることになりました。受賞者の皆様、おめでとうございます。副賞としまして、前回同様、次年度大会の懇親会にご招待させていただき、また懇親会にて表彰させていただく予定です。

第16回大会懇親会の席上で杉山理事長がおっしゃっていたように、研究発表のポスターの表現は年々レベルが上がってきているように思います。会場に足を運ぶのが楽しみになってきました。会員の皆様には、充実した研究内容を、美しくかつ分かりやすく呈示し、ますます大会を盛り上げていただければ幸いです。なお、第17回大会では、審査基準に発表内容を加える方向で検討中です。あらためてお伝えいたしますのでよろしく願いいたします。

学会大会活性化特別委員会委員

川野健治（国立精神・神経センター）・堀毛一也（東北福祉大学）・鹿毛雅治（慶応大学）・大久保智生（香川大学）

<優秀大会発表賞受賞者からのコメント（発表順）>

尾見康博（山梨大学教育人間科学部）

実は、帯広での発表は、心理学系の学会での発表としてはすごく久しぶりのものでした。7年ぶり、いや、第一著者としては11年ぶり、あ、でも待てよ、本学会では実に14年ぶり（！）でもありました。こんなに発表しない癖がついていたのになぜ発表する気になったかと言えば、第16回大会の（形ばかりの）準備委員でもあり、発表数を少しでも多くしなければ、という思いがあったためです（健全ではないなあ）。中身の薄さを見た目で補うというスタイルの発表でしたが、本質的なご質問をいただくこともでき、大汗をかきつつも、発表してよかったと思ったのでした。発表賞受賞というおまけまでついてきて、少し照れくさいと思いつつも、素直に喜んでおります。



井上美沙 (駒澤大学大学院人文科学研究科)

このたびは、思いがけずこのような賞をいただきまして、誠にありがとうございました。身に余る評価をいただきましたことを、準備や発表の際に沢山のアドバイスをくださった先生方に、まず感謝したいと思います。

今回の学会は、初めての学会発表の場でしたが、研究に関する情報や意見交換の場としても、たいへん充実したものでした。今回の学会で得られた多くのことをきっかけに、今後も研究活動を進めていきたいと思っております。



外山美樹 (鹿屋体育大学体育学部)

この度は、優秀大会発表賞を賜り、大変光栄に存じております。たくさんの方々のコメントをありがとうございました。

本学会の大会は、発表者と質問者との心理的距離が非常に近く、他の学会以上にアットホームな雰囲気のある大会だと思います。大会参加者の半分以上は懇親会にも出席するという、極めて稀な(!)学会ではないでしょうか。たくさんの先生方、院生の方と温かみのあるふれあいができます。大会発表や懇親会に参加するのを、毎年楽しみにしております。

これからも、パーソナリティ心理学会の一員として、大会を盛り上げていけますよう努力したいと思います。



田中麻未 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)

この度は、大会発表賞を賜り大変光栄に存じます。調査にご協力頂いた皆さま、日頃から温かいご指導を頂いております菅原ますみ先生ならびに共著の先生方に深く感謝申し上げます。また、発表当日は複数の先生方から貴重なコメントを頂きました。この場をお借りしまして、心よりお礼申し上げます。

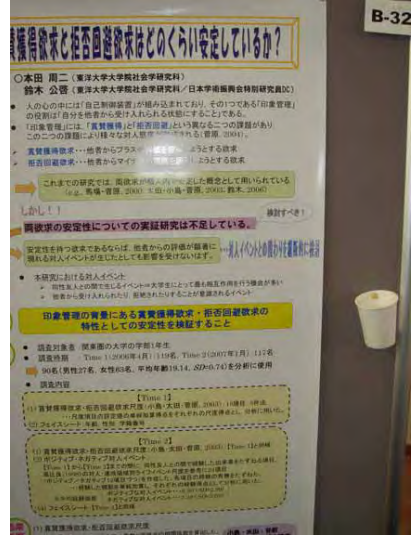
今回の受賞を励みに、よりよい研究ができますよう真摯に取り組んでいきたいと思っております。今後とも、皆さまのご指導を賜りますようお願い申し上げます。



本田周二（東洋大学大学院社会学研究科）

この度は、第16回大会発表優秀賞を頂き大変光栄に存じます。調査にご協力頂きました皆さま、アドバイスを頂きました共同研究者の鈴木公啓さん、そして日々大変きめこまやかなご指導を頂いている安藤清志先生に深く感謝致します。

まだ、始めたばかりのテーマの研究ではありますが、今回の受賞を励みに、これからも真摯に研究を進めたいと思います。今後とも皆さまのご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。



新田静枝（岩手大学大学院人文社会学研究科）

この度は、大会発表賞をいただいたということで、大変うれしく光栄に存じます。

今回の発表では、さまざまな方とお話する機会に恵まれました。そうした中で研究内容を説明し質問に答えたりすることで、新鮮な発見をし、自分では気がつかなかった視点を獲得することができました。本当に意義深い大会となりました。

大学院修了後は公務員として働くこととなりましたが、また機会をいただければ是非発表させていただきたいと思っています。



日本パーソナリティ心理学会第17回大会へのご案内

大会準備委員会 委員長 坂元 章
副委員長 菅原ますみ

本年(2008年)11月15日(土)と16日(日)の2日間をかけて、東京都文京区にありますお茶の水女子大学のキャンパスにて、第17回大会を開催させていただきます運びとなりました。以下、本大会で予定している企画についていくつかご紹介させていただきます。

本大会ではまず、米国から2名の著名な研究者をお招きし、ご講演をいただくことを計画しております。

1人目は、Dan P. McAdams先生(ノースウェスタン大学)でございます。McAdams先生は、心理学分野におけるナラティブ研究や生涯発達研究の分野で顕著な業績を挙げられ、アメリカ心理学協会(APA)からたびたび賞を受けておられる世界的第一人者でございます。

2人目は、Craig A. Anderson先生(アイオワ州立大学)でございます。Anderson先生もまた、メディア暴力における世界的第一人者であり、先生の提唱されている「攻撃の一般モデル」は、メディア暴力研究ないし心理学における暴力研究の一つの到達点と言えます。

また、本大会では、10個以上のシンポジウムなどを開催する予定ですが、以下の企画が固まっております。

第1に、「クロスロードとしてのパーソナリティ研究—過去、現在、未来—」と題するシンポジウムであり、木下富雄先生、越川房子先生、菅原ますみの3名の話者による講演の後、渡邊芳之先生からコメントをいただき、また、フロアからも多くのご発言を頂戴しながら、大会参加者全員で、本学会やパーソナリティ研究のこれまでのあり方を評価しつつ、今後の方向性を探るイベントとしたいと考えております。

2つ目のシンポジウムは、「人はなぜ犯罪を起こすに至るのか—パーソナリティとの関連を探る—」であり、大淵憲一先生、酒井厚先生、相澤仁先生から、犯罪とパーソナリティの関連について、それぞれ犯罪

心理学、発達精神病理学、少年非行の現場における動向などのお話を伺い、また、安藤寿康先生からコメントをいただきながら、広く意見交換ができればと存じております。

3つ目は、「モバイル・リサーチ—パーソナリティ研究の新たな可能性—」でございます。現在、広く普及しております携帯電話を、パーソナリティ研究に活用することについて、すでに携帯電話を調査研究に活用されておられる阿部美帆先生、森津太子先生、川浦康至先生などからお話が伺えることとなっております。

このところ、大会において、口頭発表のセッションが設けられておりませんでした。本大会では、ポスター発表だけでなく、口頭発表のセッションも設けたいと存じております。発表者には、どちらを希望されるかを伺わせていただきます。

また、例年通り、優れた発表に対して優秀大会発表賞を授与する予定でございます。研究の質と、発表の質の両面から審査を行い、受賞者を決定することになるかと思われま。

さらに、大会のセッションとして、臨床発達心理士の資格更新のための研修会を開催することも計画しており、現在、その企画を進めております。

大会の成否は、参加者の先生方がどれだけ積極的に取り組み下さるかにかかっているかと存じます。先生方にとりまして実りある大会になるよう、私どもも努力致したいと存じておりますが、先生方に置かれましても、是非ご協力を賜れば幸いです。準備委員会メンバー一同、多くの会員のご参加を心待ちにしております。

近日中に、本大会のウェブサイトを立ち上げる予定でございます。何か決まりましたら、そのたびにまず、そちらでご報告致しますので、適時ご参照賜れば幸いです。